

門 7 9
親
卷

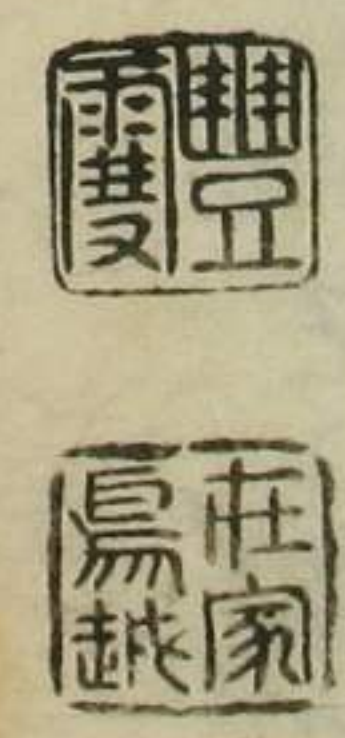
序



養壽齋挿花の冊紙著前編に成て
著く世に陳く其編と関るふ百字千花
紙人少欲者紙くくは道びく事
嬰児は食と與るれく標車は縁紙紙をが
たわ一指教の字を愛するを方歎きは
法もも奥旨は傳渡るも本とく紙の紙
中是を紙く紙を看るを告其遺傳紙
張ん少く養ふ肯 中曰傳圖紙彫く心と

入と見え者堪得の働くしやと玉例に之を
せん徒よせりこと又耐に此器のわづらや
於是に於て秘画に并て真書投と頼并
古律に於て授且亮毫と下し其残権と
拾ひて流編とすべし

享和元年秋 宝廩前 徳豊雪記



插花早指南

後編

卷中目録

- 一 四季挿華式 附口傳 指圖五十瓶
- 一 客に花を望むる時心得の事 附 花盒飾圖式
- 一 花器と薄板取合の事 一 挿花床を置榻の度
- 一 花を置けし得 一 函撥と用る心得の度
- 一 花を露する時節の事 同 露をさるる花器の度
- 一 高等所の花挿方心得の度 一 陰陽の度 付 挿方
- 一 真行草と云ふ説 一 花器見立の度
- 一 名物の花器挿華 一 換撥に花をさるる度

- 一 掛物かかもの対たいしく花挿はなさし 同画どうがの縁えん取とり合あい挿さし 花はな
- 一 挿花さしかわ用もち捨すての夏なつ十五ご條じょう 并なら傳でん
- 一 花はなの物もの葉は斗と紫むらさ有あ物もの花はなばり挿さしと夏なつ
- 一 添そもの人ひと得え并なら挿さし方かた 一 雅みやび花はな取とり挿さしと得え
- 一 寶物たからもの葉は取とり挿さしと事こと 一 花はな形かたちき物ものと事こと
- 一 夏なつ葉は取とり挿さし方かたの傳でん

一 極ごく松しょう傳でんの部ぶ

河骨かこつの傳でん 番ばん式しき 水仙すいせんの傳でん 番ばん式しき 萬年まんねん青せいの傳でん
 葉は蘭らんの傳でん 紅葉こうじの傳でん 丘物かきもの沢さわ物もの一いつ瓶びん挿さし傳でん
 紅こうと白はくと一いつ瓶びん挿さし傳でん 庭てい葉はの取とりと挿さし傳でん

附録 挿花さしかわの由来ゆらい此こゝ夏なつ

以上



元日梅げんいちばい 萩はぎ栞しり子こ

前編ぜんぺんのついでに 早春そうしんの花はなの挿さし方かた
 萩はぎ栞しり子この挿さし方かたは 但たゞ一いつ元日げんいち梅ばいの挿さし方かたに
 似にて 萩はぎ栞しり子この挿さし方かたは



眞のうらぶらとて
 扱へば枝よんが
 如番

彼岸橋

花はくまらりて物もれど
 うまらうふままへ一
 如番



椿
 智籠

手板と用ゆり
 興一く記文

若虫
 水仙



初子の日
 若代と母をよき
 ふ日の松のそと

葵子花

存方お編あり



藤
 花の桶のまはらぐらさく
 梅のめいもほまじ

連翹



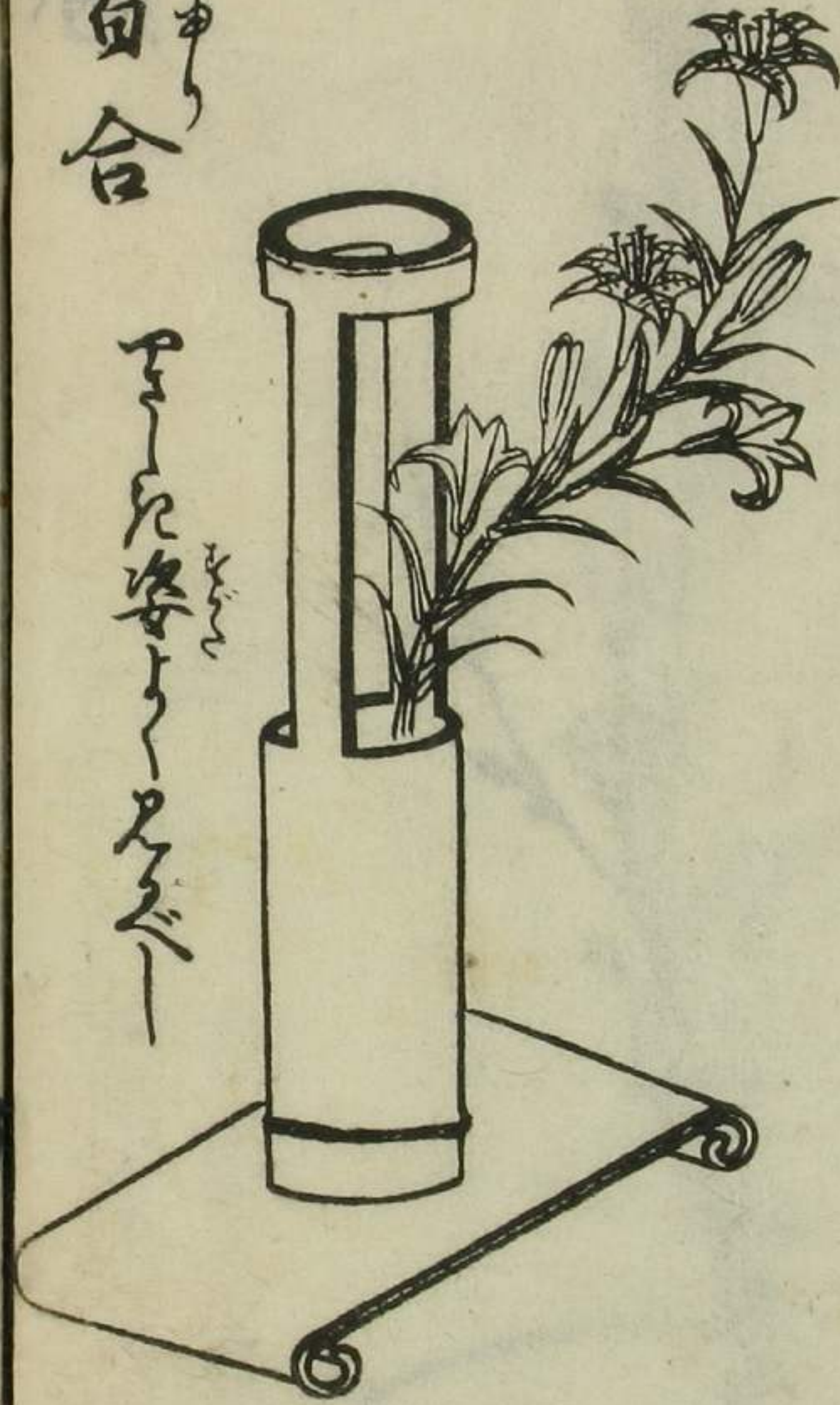
一枝のちゆりやを付く番とくまへ

濱葉はまがは



一輪いちりんうらうら花はな

姫百合ひめゆり



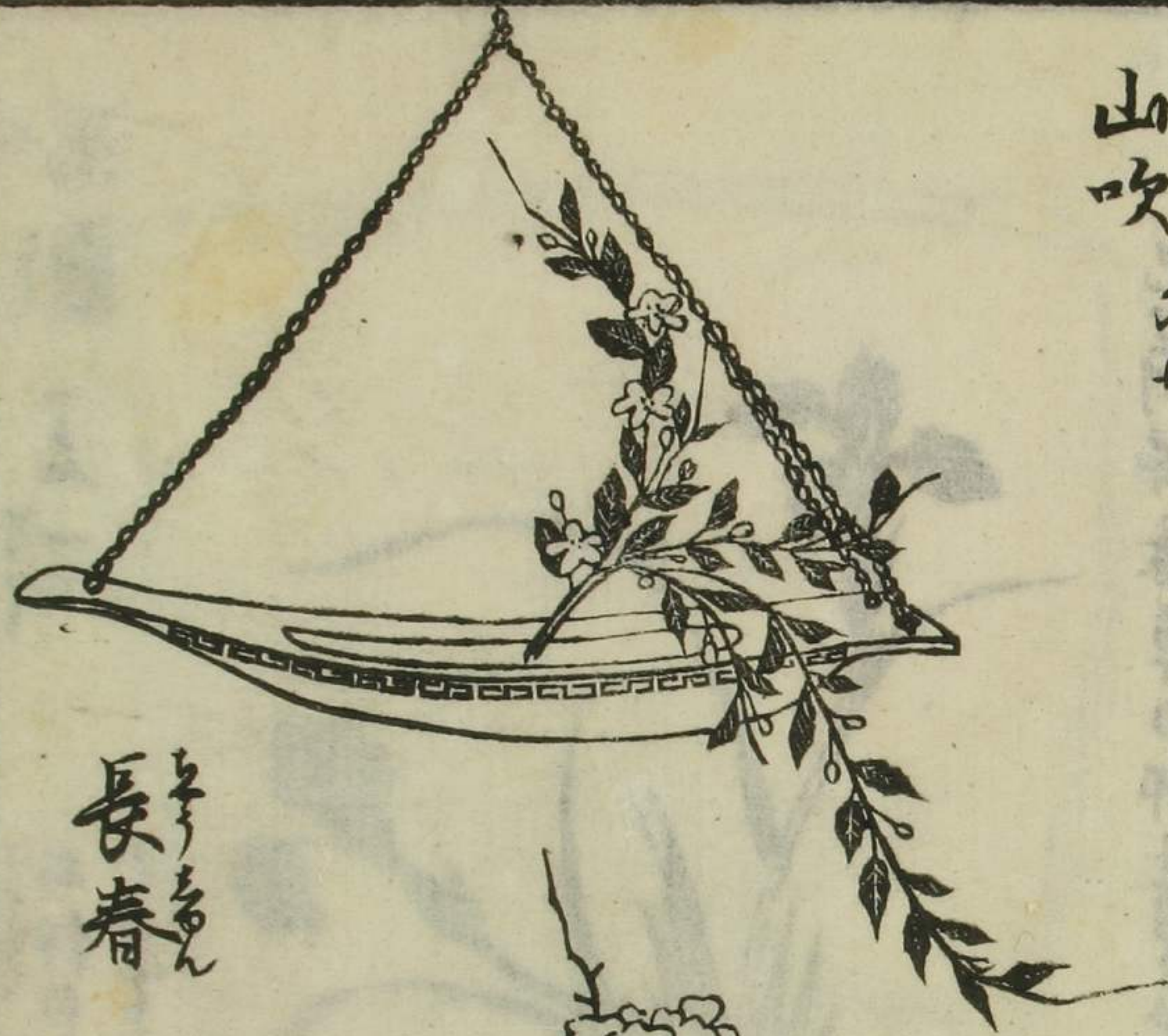
うらた容うらたけようようえんえん

山櫻やまざくら



梢さかの容けいえんえんうらうらえんえん
挿さえんえんとと付けべべ

花はなををわわくくたたんんりりよよくく
ままままととべべ一一信しんとと本ほんのの花はな
枝えだののうう肝かん要ようははらら



山吹
吹
入
船

長春

とげの
奥に
花の
車
舟



躑
躑



小
年
練
又
折
花
草

牡丹



己前編毒草の部有と云ども牡丹
獨樂地有古くは位と圖とあり

大籠に挿さるり合ふや

馬蘭 一名一八



此花は馬蘭の系を分
わたりてあり

花のり

花基と用事奥記



花子 本名 瞿麥



蓮

巻葉の上の葉よんがてあそび
さきぐー下の一葉水たきよもさきぐーを挿



花のり
蓮の葉よんがてあそび
さきぐー下の一葉水たきよもさきぐーを挿

肝要なり

水葵すゐあひ

河骨かほね

紫陽花あざむぎ

美人草びじんそう

木名醫子きなゐし

河骨のさし梅を編
有しとぞもれ奥よ
極傳とぞと

二瓶ふたびん一ひと瓶びんの姿すがたううええ
挿さささるる水みづ菰こ

花はな器きの取とり合あい
依よ意いととくく

卓た下げのの花はな々々々々
よりより葉はれれ志し所しよりり
せぬせぬ下げ軒けん要やう好こうり



大菊 一挿

馬盃



女房の口傳り

知事

業平朝臣

芍薬

葉は浅くはさみわがごとく挿す
花の下をひきおろす





秋朝顔



秋海棠

竹
或枯紫の
用

女郎花とらぎ 小菊こぎく



秋の草花あきのくさな 小菊こぎく 女郎花とらぎ

桔梗ききョウ



はやしんばいじん
桔梗ききョウ

大菊おほぎく

秋の草花あきのくさな 大菊おほぎく 根の好む身ねのこのみ 女郎花とらぎ 小菊こぎく



かへびねくさ
アトと小菊の脚
くさ 女郎花と小菊
工くさ 女郎花と小菊

蘭 らん

花器と花瓶の連のとり合
作意の付べし

野菊 のぎく
刈置 かり置き

紫 むらさき
苑 えん



大葉のはひさし葉は
挿ぎ—花場の奥に
記と





薄

一名尾花

野菊

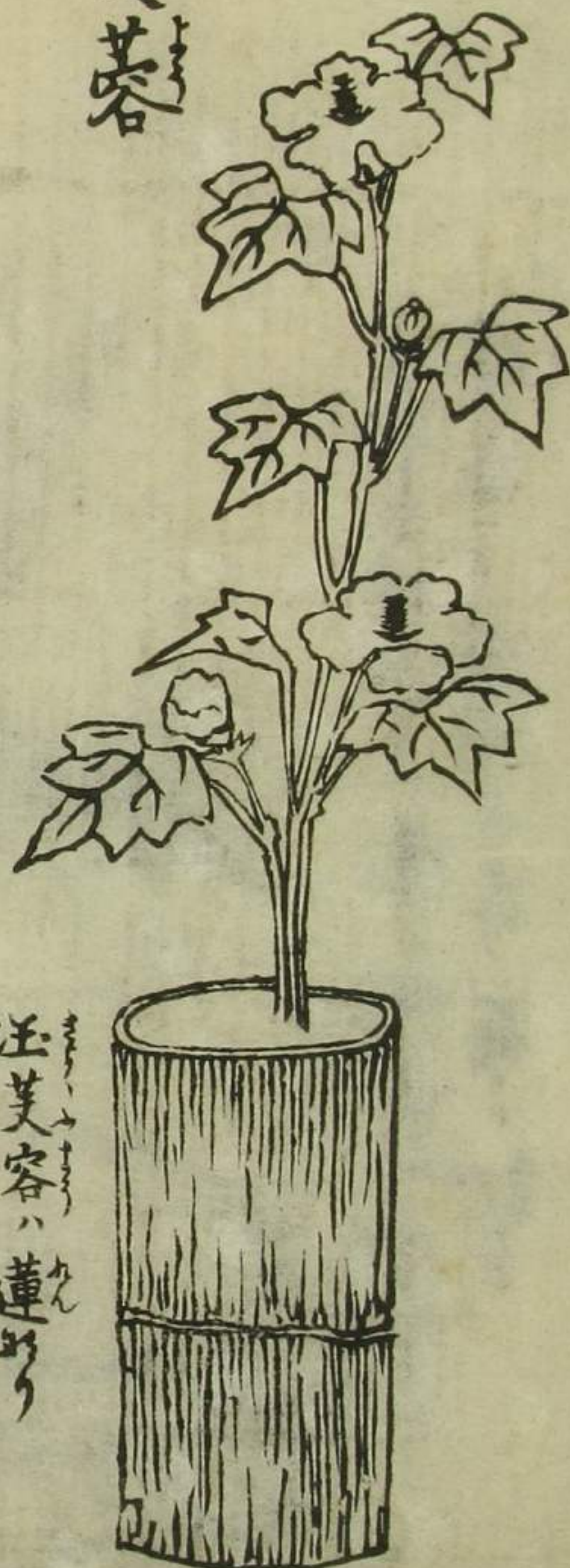
秋の野菊の姿
遠く挿し

小菊

花とてんばおと交り挿し
はらねるる其つる



本芙蓉



玉芙蓉ハ蓮の
根とて挿し

紅葉



口傳はくよま

青葉ははせとも柳は
花はき物に半奥に記す

薊

下野



とげある物のま
奥よまの記

水仙

一武教おわく梅
 時の葉を次々と
 けり番と足して

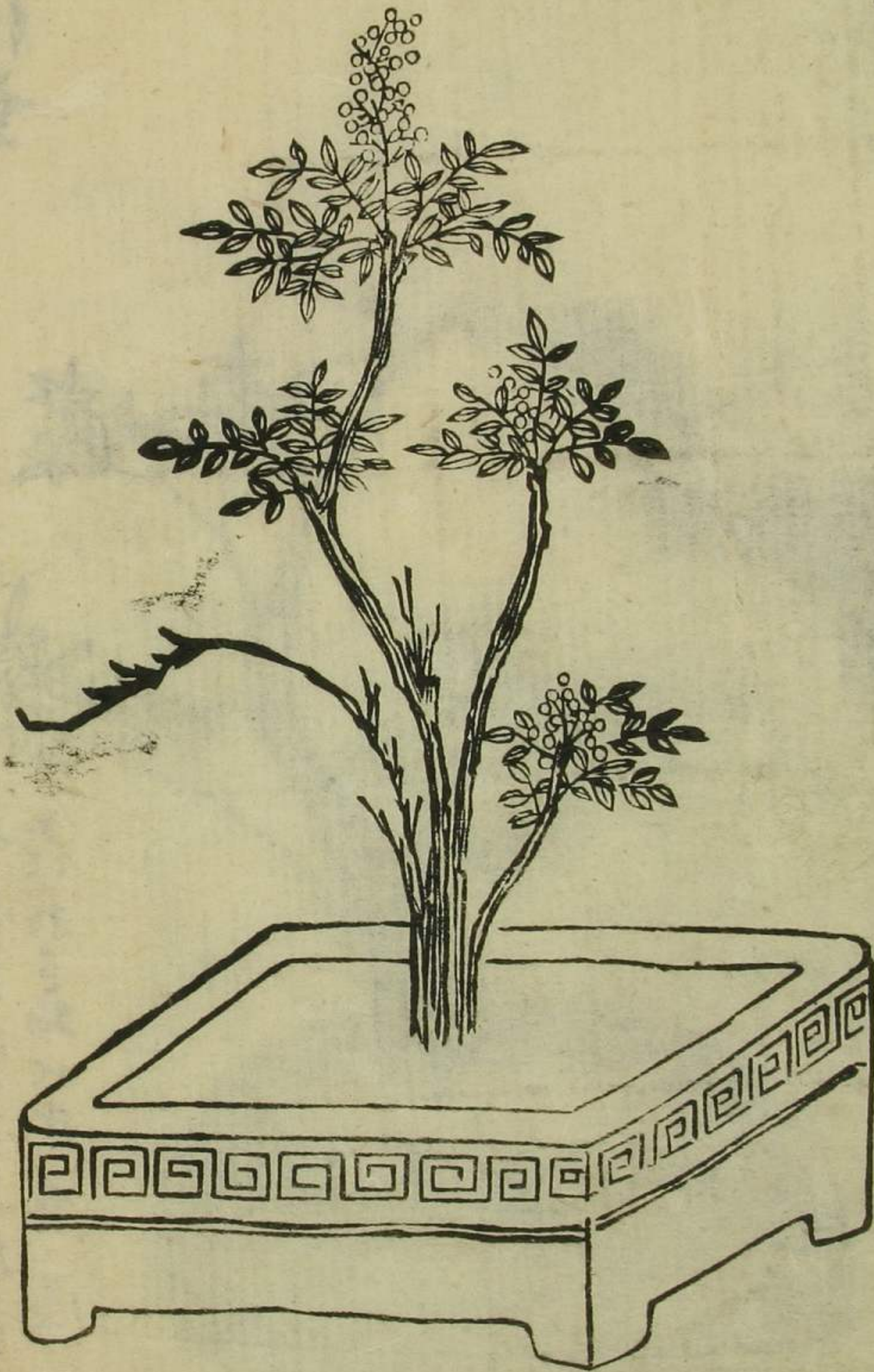


寒菜



多伝方分編有
 之と伝口傳奥有

南天



山茶花

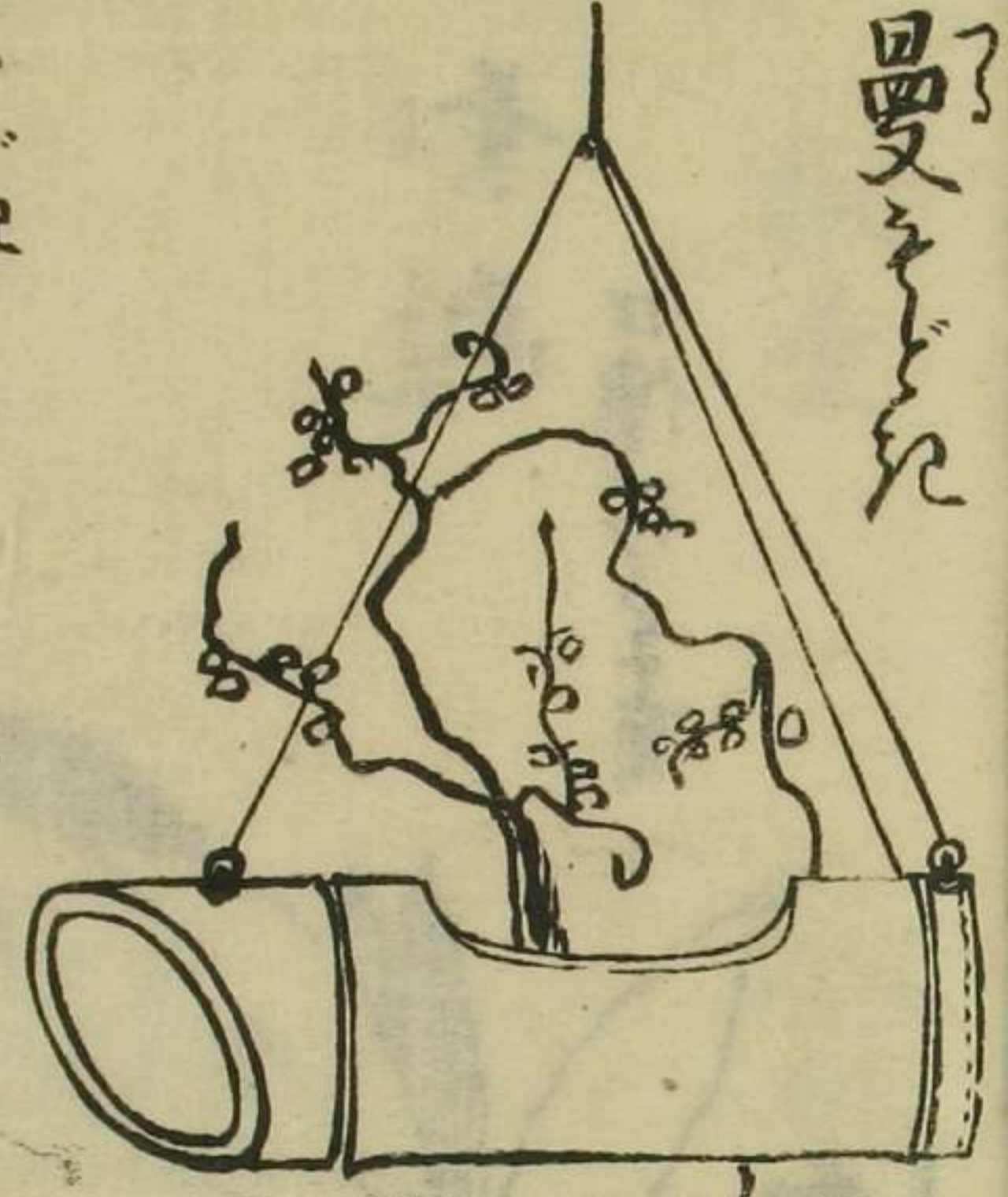


萬年青

基原は櫟の葉組を以て傳ふる者



曼



白舟



早梅 又 冬至梅



春の枝は梅の花は冬に咲く

猴
子
柳
水
仙

そのまゝのちび一瓶のまゝに挿す



葉
蘭

口傳り有り

葉は表裏ともろく根は
ゆるゆると



批
葉

百草千花は霜よ葉なる
秋事心得有る

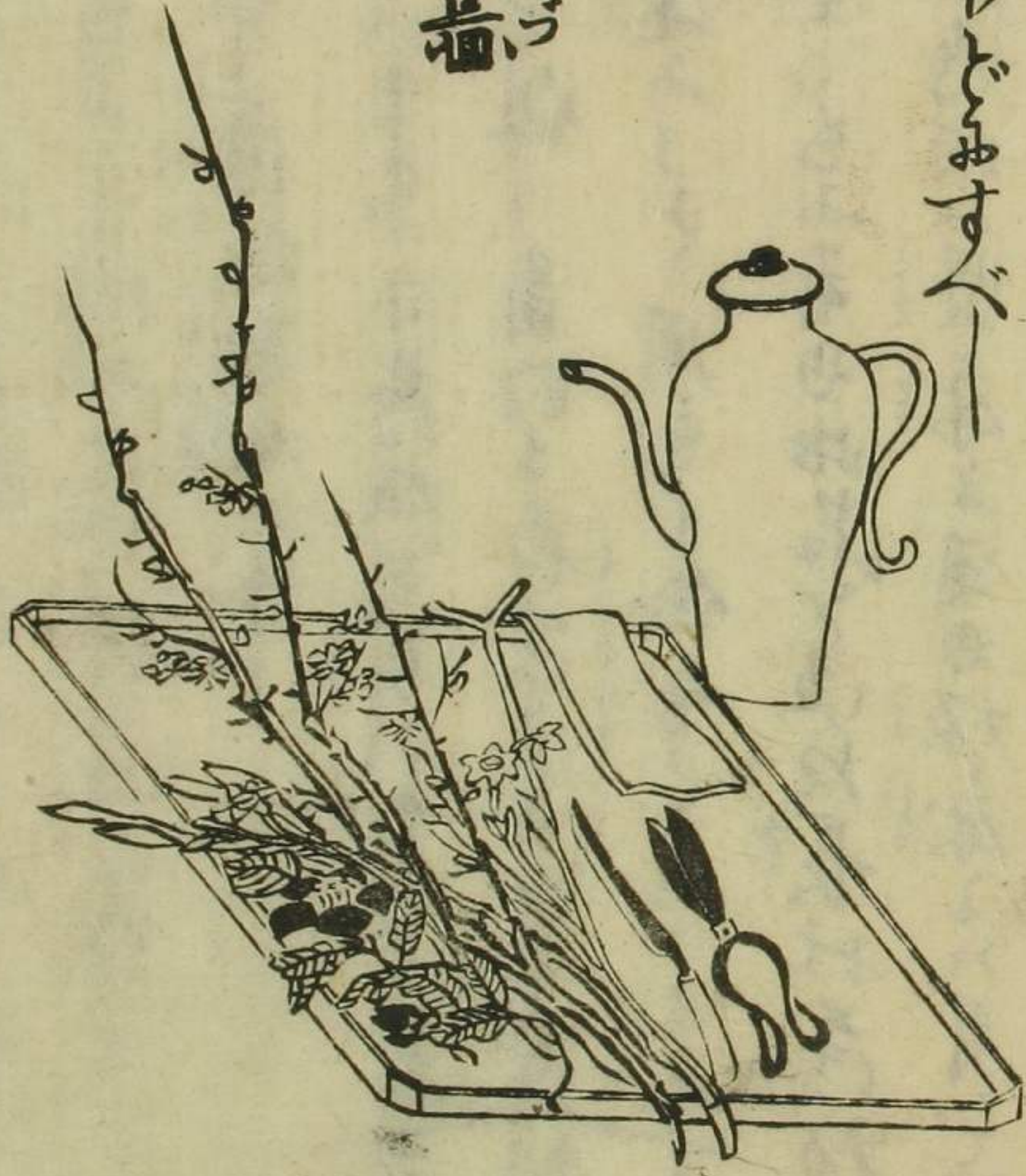


歳暮のむすの葉の色はやくと
あふ柳とよりとけ又の松の色はぬき

客に挿花所望する時心得の事

客に花を不望する時は先花器（花瓶）は余り入座（居座）
 花を盆へ花を挿せおろし込の木使小刀で巾紙深き座敷だん
 上縁（きざり）を挿し客に花をひらきもたれりともたれぬ
 次水（みづ）をいれ水を程よく入足もそれ側（そば）に置りて
 花のすこしも入せば枯枝枯葉（くせき）もさし修（き）す込の木も截（き）
 せ兒（こ）のうしろに流（なが）し花巾（はなぬい）の白麻（しろあし）を寸法（せんぱう）定（た）りし
 是（こゝ）に寸位（せんばい）を可（べ）也（べ）以（も）洗（せん）れ湯（たう）敷（敷）き形（かたち）を
 修（き）り水（みづ）に程（ほど）よく入（い）れ花巾（はなぬい）を湯（たう）敷（敷）板（いた）に
 懸（か）け花巾（はなぬい）も水（みづ）に洗（せん）せて次（つぎ）の室（むろ）に下（くだ）げ次（つぎ）に
 客（きやく）に指（さし）も下（くだ）げ板（いた）に懸（か）け
 味（あじ）よく挿（さ）し入れす座（ざ）に板（いた）を懸（か）け花巾（はなぬい）を
 客（きやく）に懸（か）け入れす座（ざ）に

花盆の置



番（ばん）にぞとく傍（かた）にぞとく式（しき）三種（さんしゆ）花巾（はなぬい）裁（き）り出（い）はさり客（きやく）の高（たか）下（くだ）ぬ

まろせ盆の心得有る一貴人の本具より平人の廣ゆゑ
又ハ折敷めくもより一角指の花盆の側は蓋一又蓋は
上は柄もよくもより一付の上流は下流は

花蓋と薄板取合の事

丸き花蓋よりまろせ蓋板を用ひ角なる花蓋より角板
うは板取用と但一角形の花蓋より角なる薄板を用ひ
此角遠しとく用ひを働有くより又すこし
薄板の方圓とも用ひ此名とゆは長は薄板ともゆは
但一薄板の置床より用ひ板床より用ひ板床とも
一流はゆくりも是る板の板床も用ひ是の板と

板との居すく故あり

挿花蓋は蓋より挿すは事

挿花蓋は蓋の丸床は真中すこよりすこしむらむらと
たぐはし一浅き床のむらよりすこし程あるがよりのとも
草本の姿もよりの高流の事目も定形一

花蓋の床は蓋より挿すは事

花蓋の床は蓋より挿すは物なり故に床はむらむら
但し蓋の蓋は置敷ともなる床の花蓋蓋もより

蓋板取用は事

張床より法付取厭く蓋板と用ひなり床は外より用ひ

井の勝手はまじりし且壁床の中汀を打く物之
花を露にうは付節は事

夏の花をあまうちのからぬやうく葉はより水とさ
つとけ挿ぐ一むく一修く葉ももみあぐあぐ
打べー是夏の涼く見するきあぬり日月より八月はぐ
とさぐー

露くぐり花を乃事

修く花を入る葉と打ど滴はたをさむくなり
唐洞の花葉の中みらと入る外は汗をまねるは是
露に打ど又青葉の葉より古より打ど舟もさぐり
露も

夏うら

高き所の花挿方ん得の事

毎花約花の敷地高くおれ花もみく挿時
るる時花葉もみくはよりく思は故に挿す陽
見あぐさ挿ぬり

陰陽とひの事

花の春風陽と裏と陰とに葉も是はれぬド又春風
陽と園風陰ともう流も有るれ溜り春の陰ととも
陽風肉はぬくむ故に陰中の陽をむくは散らるるは
よるごとく陽中の陰ぬりごとくは挿す是は挿す

通海わわぐ挿花の原付印席の奥うらを自然の理と
とり用也一

同陰陽とばもく挿花

陰陽の天地自然の名をさし挿花一瓶の中ふ華をふも
陰陽とばもく挿花は是別働隊付く久く花葉大
表成切やく裏にすぬく尺由下すよと一裏に勝
く陰の境あり

真行草とらふ後之事

至る所真と云ふ法教と行と云ふ所を以て草と云ふなり
又挿花も其の行草あり花は一瓶の内よ其行草は付る

も同流の若も軍持の形なり是を以てと云ふは
付る事やとく取むと云ふと挿花も真行草といふ
え来業道より出ることよとく真の産するがみく行の
何ゆびがごとく草のけりおみくやと足中のやばり
立花も此三阪此立花と作る形なり花の大方立華の
方の真もく挿花の通とく草もり足全く名づる
ばりあり挿花も散り用也一と心得

花見見立之事

中ぐ大法牡丹芍薬の類ハ籠の花屋より蓮川骨杜
若の類ハ口唐をたより水仙の類ハ細口物より後と夫

短たりのい砂津薄端敷より一丈半物に無花生公菟乃
敷より一此外花と答との取合面白く心掛けを一竹と
生るお竹の花入紙好まざる敷ひよく心を憚る一

名物の花答お挿し得の事

名物の花答はうらら紙貴紙とる故は葉清より少りと挿し
ており又他流よ云名物に花答は挿花より少も備無
物おりと挿しは込紙ははる若おはつと癖さど
付んて紙はとて又一瓶お答よ申さく名物の花答
お挿花望まも解且一挿さく火と又一瓶よ名物の
花答よ見おあるすお挿さく一と云

挨拶の花と挿し事

先三瓶を空挿し中の一瓶は左右清く挿す一又左
右に瓶一對のまじく申紙清く挿す一足挨拶の挿し
形を三瓶お挿し色紙好ま

掛物お対し挿し事

総て掛物の人物多敷の敷又名印と厚さぬすお挿す一
鑽ハ勿挿し事おり此外無物よ有草本紙さび無物
此画の色と目どりの花を挿さく

同無物の画に縁紙取合挿花の事

掛物の畫紙と縁紙取合挿花の事肝要

山水の画よかればあま或ハ福澤壽やぶら布袋竹あやうし康やぶらよをみぢら
遠藤とほふまふ柘しやく戸と北きた勢せい世外物せがいぶつ活かつのゑん入いりたり或ハ詩し哥かの意いと
清せい或あ賢けん仙せんの人物にんぶつももらられれ此こ事じ亦また凡ひん引ひく其その縁えん状じょう
取とり合あ作さ意いよよ後ご〜〜くさう支し首う首う〜

又また既すでに梅うめのゑん画ゑにたかかひひけけくく中ちゆう卓たははりりよよ一いつ瓶びんの
面めん白はく作さく意い形かたちれれどもども手て練れん北きた上かみ形かたち〜〜しん師し哲てつの教きょう正せい作さく
金かね見み事ことなり

一いつ瓶びん花はな用よう権けんの事こと 十五じふご葉え 每まい口くち傳でん別べつ此こ事じ也なり

一いつ瓶びん花はな一いつ瓶びんの内うちにに花はな取とりり色いろとと挿さぐぐ事こと
但たゞ一いつ右みぎ色いろ取とりり色いろとと挿さぐぐ事こと人の西にし中ちゆうよりより〜〜花はな挿さぐぐ事ことの
口くち傳でんなり

一いつ庭てい前ぜんにに花はな挿さぐぐ事こと 但たゞ一いつ獨どく樂らく館くわん有あるる事こと也なり
又また一いつ右みぎ中ちゆうよりより〜〜花はな挿さぐぐ事ことの口くち傳でん有ある

一いつ丘かみ物ものとと沃わく物もの一いつ瓶びんよよ〜〜事こと 亦また一いつ右みぎ中ちゆうよりより〜〜花はな挿さぐぐ事ことの
口くち傳でん有ある

一いつ草くさ花はな一いつ瓶びん生せい不ふ挿さぐぐ事こと

一いつ瓶びん中ちゆうよりより〜〜花はな取とりり足あし取とりり〜〜花はな挿さぐぐ事こと
但たゞ一いつ右みぎ中ちゆうよりより〜〜花はな挿さぐぐ事ことの口くち傳でん有ある

一いつ竹たけととげげああるる物もの花はな挿さぐぐ事こと 但たゞ一いつ右みぎ中ちゆうよりより〜〜花はな挿さぐぐ事ことの
口くち傳でん有ある

一いつ白しろのの花はな挿さぐぐ事こと 但たゞ一いつ右みぎ中ちゆうよりより〜〜花はな挿さぐぐ事ことの
口くち傳でん有ある

一いつ草くさ花はな挿さぐぐ事こと 但たゞ一いつ右みぎ中ちゆうよりより〜〜花はな挿さぐぐ事ことの
口くち傳でん有ある

一切葉折を花と挿す事

社若の類にあつては挿す事ありけり。其の用事あれど、
花の類は遠くても挿す事あり。但し貴客の正座敷に付の事あり
於侍あり。柱などよき葉は挿す事あり。其の他も右に准す。

借葉借花挿す事

出生の類は遠くても挿す事あり。但し貴客の正座敷に付の事あり
借葉は好まざる事あり。

一負相の花取挿す事

花葉をくわく又示ぬく。皆けり。其の用事あり。其の他も右に准す。
別つり。其の用事あり。

一床縁より外へ花葉の出る事

床縁より外へ花葉の出る事。其の用事あり。其の他も右に准す。
あやまると花はさしをさす事あり。

一遠本の事

は之本は遠本の事あり。其の用事あり。其の他も右に准す。
根元をさし。其の用事あり。

一花器中のさる物に花挿す事

花器中のさる物に花挿す事。其の用事あり。其の他も右に准す。
花器中のさる物に花挿す事。其の用事あり。其の他も右に准す。
花器中のさる物に花挿す事。其の用事あり。其の他も右に准す。

葉あり物葉ばり葉あり物花ごり事

萬本草も花あり物葉斗葉あり物花ごり挿す
花ごり立花あり花あり花ごり挿す
挿す事あり。其の用事あり。其の他も右に准す。

好く挿す所の又況しんどもさけと夏とんせん

くすくす此二草とんを花に付し葉瓜生とるなり

夏水仙 一名金燈草正月の葉生

曼珠沙花 一名石蒜 九月葉出く翌年四月枯る秋の彼岸

足出生なり故よ仮葉仮花とるべ

添をれん得共挿すの事

添物瓜とん付しその得くくちづ真の山際瓜高くとん

登一叔添その挿方しそ此其の事とる草茎とん

くく物もれ添くく適分なりと添くとく

草の結しと添極挿なり真の本瓜添とれく適

何く又真れ本と添物の根とれきとく又く

か又添その根一つもくもれとく但一様く

く調く付しとん其の無用なり一種とん

くく付し添物とん一足瓜根なりとも

草瓜添とるなり草のあり高く挿とる

草瓜とる事もあり椿とる候き本なり

椿瓜添のれははくとん高代より

よるあつび又本瓜とる草と高く挿とる

難花瓜挿し得の事

難花とる古事とる挿花とる通用せざる物瓜とる

花のよきものなり 獨樂替高の為大に花のよきものなり 葉の
 美花のよきものなり 葉のよきものなり 此の好も 風情あるものなり
 花のよきものなり 葉のよきものなり 花のよきものなり 葉のよきものなり
 雑本も是の雑本なり 松松梅桃梅桃松松梅桃梅桃の類なり
 雑本あり 葉のよきものなり 葉のよきものなり 葉のよきものなり

實物菓をこれに挿すの事

菓物を先梅桃の類に挿すは花のよきものなり 故に實のなり
 花のよきものなり 葉のよきものなり 葉のよきものなり 葉のよきものなり
 實のよきものなり 葉のよきものなり 葉のよきものなり 葉のよきものなり
 花のよきものなり 葉のよきものなり 葉のよきものなり 葉のよきものなり

花のよきもの挿すの事

花のよきもの挿すは花のよきものなり 葉のよきものなり 葉のよきものなり
 花のよきもの挿すは花のよきものなり 葉のよきものなり 葉のよきものなり
 花のよきもの挿すは花のよきものなり 葉のよきものなり 葉のよきものなり
 花のよきもの挿すは花のよきものなり 葉のよきものなり 葉のよきものなり

夏草花の挿すの事

夏草花の挿すは花のよきものなり 葉のよきものなり 葉のよきものなり
 夏草花の挿すは花のよきものなり 葉のよきものなり 葉のよきものなり
 夏草花の挿すは花のよきものなり 葉のよきものなり 葉のよきものなり
 夏草花の挿すは花のよきものなり 葉のよきものなり 葉のよきものなり

故に安優く挿ぐ一真の葉はふ事肝要なり傳て
 葉の夏秋も水原の葉も情る葉一二枚はふ付事
 能くはうりてよし

極秘傳の事

河骨挿方并に揚了此傳

若編は傳と記して之も打中秘傳の極秘傳なり
 まづ河骨挿方思ふ葉の花の葉はみよの人挿ぐ大
 おびましく互違ふむやなく又葉の田のすたしんを
 指のばしめく押ひめく其後花葉もむよのよを
 やせり能くはうりてよし

仕極器のごとく

あむびま
 びのひび
 皮と赤の付ぬ
 手とすべし



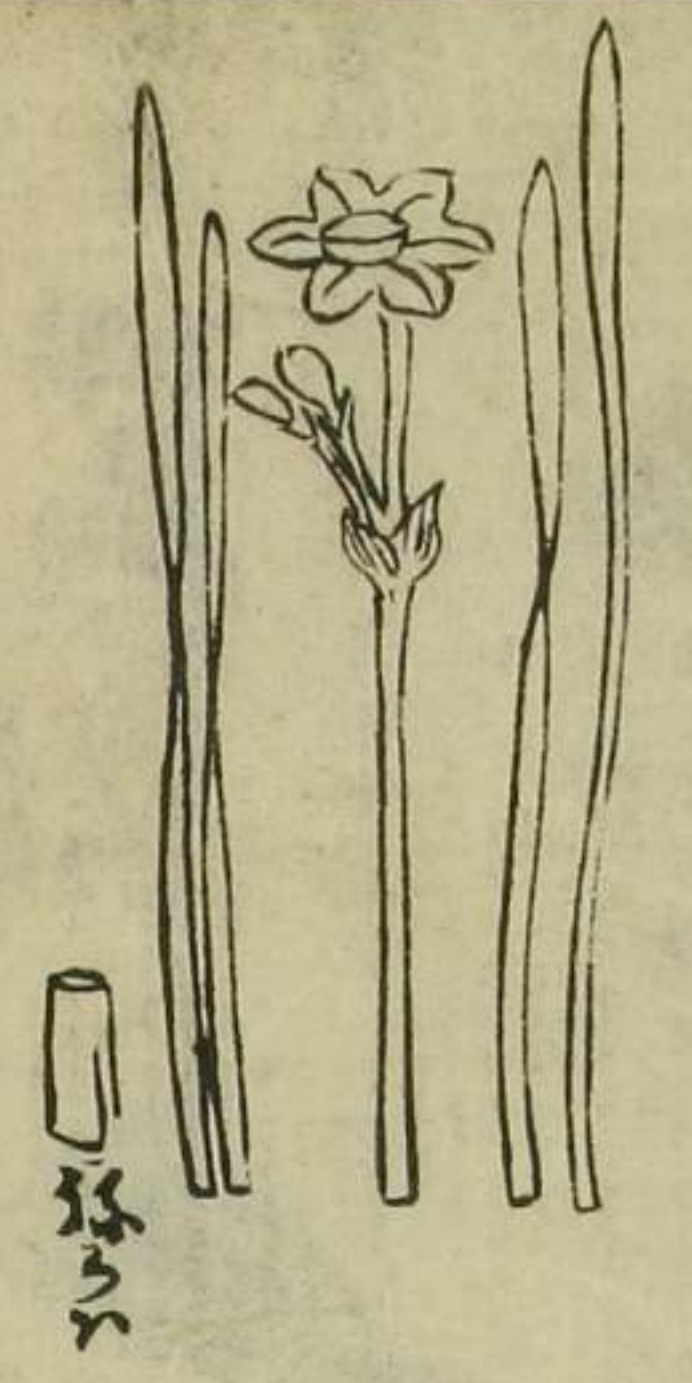
葉は此大筋瓜
 指のばしめく
 ひめく押ひめく
 極



播のこくめく挿ぐ
 但し水暖れれどま
 播井戸形くばお編の如くすべし

挿方の花上はむ蒼と下は赤ふ是出生なり
 水仙さし方此傳

足も花枝上より花をさし下へをふ一茎は葉を殺し
 但し数おほく平水にやま生る付ん水にせん花を
 一茎は此中より有べし又とらと交るもよるし葉を
 曲げ付る事又花の首に引おろし極番に見ると
 一年に用八重ハ
 教とて用大
 先終らんと平
 おそくおそく
 花より引ぬげ
 かつらうけり



一年に用八重ハ
 教とて用大
 先終らんと平
 おそくおそく
 花より引ぬげ
 かつらうけり



葉は中の
 去と葉
 より大指の
 つらうけり
 花より引ぬげ
 かつらうけり

花の茎も肉に志どきとて葉を
 花より引ぬげ
 かつらうけり

葉を
 二枚を合
 くと左
 記は之



但し初んの肉に花をさし下へをふ一茎は葉を殺し
 但し花性より思ふに花をさし下へをふ一茎は葉を殺し
 花より引ぬげ
 かつらうけり

花の首えくくろむく物なり時々より石堀場を
 花の首えくくろむく物なり時々より石堀場を
 花の首えくくろむく物なり時々より石堀場を
 花の首えくくろむく物なり時々より石堀場を

大蘭挿方の傳

大蘭の根は乏なりくよやそり物なり故は其す
 よす斗ふよとぞよりくんぬぬなり是れ年づ右蘭の根
 根と心くだりまをせき低溶えしすばいより

下は挿くくくくははははくくくくくくくくくくくく

萬年青の傳

葉組と葉は一面出れども和傳わりすの真の
 葉と葉は組を葉の内は若葉二枚かたは組
 左に流き葉を葉のふと組實の葉の外に
 見出し生なり



実ハ葉の外ハ如番

如番

一花は指をすりてくもさきにも赤く後の中は魚の海も
ほしの方をみれば付之足赤いお中の根より向きの丘物
瓜よりくもるは瓜の冷まよりなる海なりとれど二
種の丈は長短も足は准くくまをくはれり

紅と紫系と一花は挿傳

貴人或は母執事等も一花は挿伝紅と紫系の
間へ赤く白れたるを挿く挿べたる白れたるも好れた時
より葉は紅と蒼瓜紫とく花は赤の間に葉の隅瓜
とくも挿伝と一又後紅も一花のすぐは葉も一花乃
紫の瓜とくも挿伝と挿伝と挿伝と二種ともよきしけぬ

すよ一花の姿ありては花とくもえれど二種より一花の
は一個ありてくもさしは同一色瓜とくもは花なり

但一花のよきとくもは花とくも挿伝と挿伝と

庭前北花瓜挿伝六半

庭前北花瓜の時に花は挿伝とくも挿伝とくも挿伝と
挿伝とくも挿伝とくも挿伝とくも挿伝とくも挿伝と
又枝瓜とくも挿伝とくも挿伝とくも挿伝とくも挿伝と
挿伝とくも挿伝とくも挿伝とくも挿伝とくも挿伝と

少一の花を挿伝とくも挿伝とくも挿伝とくも挿伝と

先始よりくも挿伝とくも挿伝とくも挿伝とくも挿伝と

花器は打ねを付く多き種は付たりと云ふ一葉一
葉と云ふ種半の葉は葉と云ふ種は付たり能く花の居る
と云ふ種は付たりと云ふ種は付たりと云ふ種は付たり
何れも種は付たりと云ふ種は付たりと云ふ種は付たり

後ろ挿花ハ見同の類は清く挿奉此道執人の人乃
心無事一形見望れ養と云ふ事ハ師は奇き事也
人ハ挿さると云ふ上達と云ふ見望の事ハ形
挿ハ父母ハ養の事也初心の事ハ心と云ふ
心無事と云ふ事ハ師ハ養ハ衆友も挿さると
云ふ事ハ師ハ養ハ衆友も挿さると云ふ事ハ師ハ養ハ衆友も挿さると
云ふ事ハ師ハ養ハ衆友も挿さると云ふ事ハ師ハ養ハ衆友も挿さると

附添 挿奉由來此事

文挿花の温觸ハ今世の挿花宗匠ハ家々々々々々
皆自己の見識以て種と云ふ事ハ師ハ養ハ衆友も挿さると
他より云ふ事ハ師ハ養ハ衆友も挿さると云ふ事ハ師ハ養ハ衆友も挿さると
釋尊ハ供下と云ふ事ハ師ハ養ハ衆友も挿さると云ふ事ハ師ハ養ハ衆友も挿さると
第一葉ハ種と云ふ事ハ師ハ養ハ衆友も挿さると云ふ事ハ師ハ養ハ衆友も挿さると
陰陽和合ハ一斛の理ハ系と云ふ事ハ師ハ養ハ衆友も挿さると云ふ事ハ師ハ養ハ衆友も挿さると
く七の道具ハ定と云ふ事ハ師ハ養ハ衆友も挿さると云ふ事ハ師ハ養ハ衆友も挿さると
二説ハ師ハ養ハ衆友も挿さると云ふ事ハ師ハ養ハ衆友も挿さると云ふ事ハ師ハ養ハ衆友も挿さると

美と愛一周年叔が蓮花愛とる類はこれ徳瓜賞
のふりく今此節花家と異なる也一又楊貴妃
花瓜投素の抛入一車りや投しすも流し一た夏
あべ一亦晚明に至り姓の表名の宏道と云ふその
いふらふ親使と云物瓜編書と云ふとも今此葉
挿花の助を好む事更也一續く知下一今世
宏道流の投とす是なり又拙する中花も昔り
有車もふ一今も今の如く挿花の規矩
事一我知東山殿義政の清時風雅ゆ一は
市物好く一茶花湯煙香挿花の美潔なる事

行きける也此れくみぬ其道の規矩法式定むるは
なりく物とるくも挿花も萬物に其格の出入る
事一末く此もなり種く此奇説瓜増補を
只其道乃廣大形ん古を部くなりされは此時代
これ時行風俗を得て挿花の姿も変りて流りて
流義とけりく一海軍も一さるる東山殿の由時
池の坊立花の法式瓜定むる時の名巻なりといふも
即席の姿なり一茶花も専ら行りて
之も軍儀あり一故一其時代を別
挿花はく瓜美ひ美樂する者連綿とる後

是今其時代より排はるる末に花解も能く
 そ北時後子値ひく時花風姿成師範く人のま
 こすく一博遠ひる成以く一流と定むるれく母
 名を附する物なり東山殿直傳きく之流の全く
 人成歌くぬるをく末流のべく大當流の義政公の
 瓶の式法と定信ひくと珠光の傳へ珠光より
 花鳥傳へ利休に至りてより以後専ら今世の風
 流と云ふなりなり此道の精を其はら成知く徳院の
 意を解へくと海々

生花早指南後編終

江戸料理通

流行料理通

首善主人著 二編三編追々集
 醍醐山人著 初編
花解小とれるを
あくあつて

全二編 一名 花船集 全二冊

花をん格の雛糸足舞物あの手法又ハ割花
小の流を花苗宮版くせと抽木の寄方を記す

全三編 一名 山家集

恵押座の時能物
花解の格秘花の物語口時の生方いふよりそあへハ
そ持後て記し花の生方を妙に記す

生花早指南

初篇 二篇
花解の格秘花の物語口時の生方いふよりそあへハ
そ持後て記し花の生方を妙に記す

文政五壬午年二月

書林

- 尾州名古屋本町 永樂屋東四郎
- 江戸田所町 鶴屋金助
- 同中橋廣小路町 西宮弥兵衛
- 同芝神明前 和泉屋市兵衛

